２０２５年度

大学院文学研究科博士課程前期２年の課程入学試験

（　冬期・一般選抜　）問題

外国語試験　　日本語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号

成績

２０２５年度

大学院文学研究科博士課程前期２年の課程入学試験

（冬期・一般選抜）問題

外国語試験（　　日　本　語　　）

一、次の文章を読み、後の問に答えよ。

タイムスリップ写真という興味深いものがある。子ども時代など昔に撮った写真と同じ場所で、(1)キョクリョク同じ服装、同じポーズで撮影するだけのものなのだが、これがツイッターやフェイスブックなどのＳＮＳでも二〇一〇年代の終わり頃に大きな話題となった。こうしたモチーフは、女優高畑充希が自らの子ども時代を過ごした祖母の家を再現したなかで撮影された写真を用いたかんぽ生命の広告にも登場した。このタイムスリップ写真、以前の写真と現在におけるその再現写真が並べられているだけなのに、昔に撮られたオリジナル写真単体だけを観るよりも、(X)私たちの気特をずっと激しく揺さぶる力をもっているのだが、それはなぜなのだろうか。

ＳＮＳ上でのコメントには「懐かしい」「気特がほっこりする」というものも多く見られるが、これは非常に興味深い。まず、自分が写っているわけでもないし、直接の知人のものでもないのに、それを観るとなぜか「懐かしい」という気特にさせられる現象を多くの人々が共有していること。たしかに私たちは他人の昔話にしばしば

ア　、たとえ自分とはまったく違うものであっても、それを自分自身のものであるかのように、楽しむことをしばしば経験する。そしてさらに注目すべきは、二枚の似て非なる写真が並べられることで、ただ昔の写真を一葉眺める場合とはまた違った情緒的効果が生じているように感じられることである。その感情はおそらく、並置された写真のあいだを私たちの視線がたえず往還して、そこに流れた「時間」の存在感が(2)際だち、写真を観る私たち自身の存在が振幅させられることで生まれているのではないだろうか。

タイムスリップ写真を観たり、あるいは自分で撮ったりするときに(3)イダく気特は、私たちが自身の過去の記憶と向き合うときの情緒ともおそらく深くつながっていて、それが必ずしも「ほっこりした」(A)温かいものだけではないこともよく教えてくれる。もちろん過去の写真は当時のあり様を保存していて、自分が「たしかにそのようであった」ことをノスタルジックに思い出させてくれることは疑いない。だがその一方で、その過去の時点は現在からは隔てられた、決して取り戻せないものであり、現在におけるその再現の試みは、どれほど精密におこなっても同一のものにはなりえず、似て非なるものにしかならないことを痛切に突きつけてくる。すなわち、過去の記憶を現在において想起し、種々の様式で再現することは、過去との距離を消して埋め合わせることではなく、その隔たりと向き合うことでもあり、結果的に、その行為は現在の自分とその当時の自分とのあいだにある隔たりをめぐるものにもなるだろう。

過去の記憶と向き合う行為の現代的な一例としてタイムスリップ写真を取り上げたが、写真という装置は一九世紀はじめのヨーロッパでの誕生以来、多くの著述家を刺激してきた。それらの思索は「写真は一体何を写し出しているのか？」という問いに関わるものだとも言える。すなわち、印刷されている（と限らないのは現代の場合であるが）一葉の「写真」が、そこに写された「被写体」、それを撮った「撮影者」、およびその写真を観る「鑑

会場番号記入欄

遺産」と結ぶ多様な関係である。たとえばタイムスリップ写真では、写真に写る被写体と、それを観る鑑賞者との関係に焦点が当てられる。もとになる写真を(4)**モ**して、年月を経た後にもう一枚の「不完全な複製」を作成することが意味するのは、被写体の人物たちにとってこれまでとは違った今だからこそのよ切さが強く実感されて、並べられた[　イ　]二枚の写真を鑑賞する私たちにとっても同様で、過ぎ去った今だからこそのよ切さが強く実感されて、その時期に近づこうと時間の不可逆性に抗うことができないという厳然とした事実である。そして、並べられた写真の人物・ものの語り、そして再構築〈『小島遊書局』による。30 ～ 32 頁〉

(5) 挑む姿が私たちの心を動かす。

(三村尚央『記憶と人文学　伝和から身体・場所・ものへ』)

問一　傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字ではその読みを記せ。

(1)　　(2)　　(3)　　(4)

(5)

問二　二重傍線部「かのように」とあるが、「かのよう」を用いて短文を作文せよ。

問三　空欄アにあてはまる最も適切な慣用句を次の中から選び、○を付けよ。

① 眉をひそめ　② 口をすぼめ　③ 耳を傾け　④ 目を利かせ

問四　空欄イにあてはまる五字の言葉を本文中から抜き出して答えよ。

問五　傍線部(A)「温かいものだけではない」とあるが、どういうことか。筆者の考えをわかりやすく説明せよ。

問六　波線部(X)「私たちの気持をずっと激しく揺さぶる力をもっている」とあるが、筆者はタイムスリップ写真が鑑賞者の気持を揺さぶる理由をどのように考えているか。本文全体をふまえて説明せよ。

二、問一～二に答えよ。

問一　次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の（　）内に直接記入せよ。

現代は科学の時代と言われながら多くの非合理（①　）まかり通っている。むろん、どんな世の中でも非合理はあり、人間は気まぐれでひねくれていて簡単に心変わりする生物種で、非合理があって（②　）それを乗り越えて生き残ってきた。また、すべて合理主義で割り切れるわけでもない。合理的に生きようと思って（③　）いても非合理を許容したい心理があり、タバコやバクチなど非合理と知りつつ止められないからだ。人（④　）何度も同じ失敗をするのも、非合理を克服できない証と言えよう。たとえ疑似科学に騙されても、人間界は多種多様であって騙し騙されるのも人間の所業の一つとして達観しておれば良いのかもしれない。

しかし、科学を仕事とする人間として、科学（⑤　）装った非合理に対して黙って見ておられない場面もある。それによって人生（⑥　）棒に振ったり、財産を失ったり、果ては命を失ったりする人が多いためだ。少しばかり注意すること（⑦　）、そんな奈落に落ちず（⑧　）済めば言うことはないだろう。非合理に気づいて踏み留まることができれば平穏な生活が送れるのである。疑似科学のカラクリを少しは見抜ける科学者として、世の中に警告（⑨　）発する役割もあろうかと思う。税金でご飯（⑩　）食べられ、好きな天文学の研究をやってこられたのだから、少しは世間に恩返しをしたいとも思うのだ。

（池内了『疑似科学入門』〈岩波書店〉による。i～ii頁）

（石黒浩『ロボットと人間　人とは何か』〈岩波新書〉による。１～２頁）

（ニ）

問二　次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる日本語漢字を直接記入せよ。

人は何に興味を持って生きているのだろうか。人間の興味の根底にあるものは、「人間」だと思う。日常生活の中で仕事や勉強に追われていると、自分の興味の根源を深く掘り下げて考える（①）を失いがちであるが、改めて考えてみれば、誰しもその興味が（②）（　　）その対象に対する感覚器官が、ものを見しる能しかも自分自身だ。ものを考える（④）のか、その答えは（③）（　　）を持っていることは、ここで言う人間とは、自分自身を含めて他人と関わる中で、他人と関わってはじめて何を知りたいのかを知ることだ。どうして他人と関わるのか、他人と関わってはじめて自分自身が見えてくるからだ。ここまでに執筆した本でも何度も書いてきたように、（他人は自分を映す（⑤）（　　）である）。

私たち人間の持つ感覚器官すべて、体の外を向いており、（⑥）中で何が起きているのかを、知覚することはできない。特に脳の中で何が起きているのか、その考えていることが正しいのかは、すべて（⑦）は（⑧）（　　）そのものに興味を持つのだと思う。

人間が社会性を持つ理由の一つも、そこにある。自分が何者であるのかを大事にする。社会とまったく関わることなく生きていく者がいない。（⑩）（　　）しかし、同時にその一方で、自分が何者であるのかを考えるようになったのではないかと思う。

受験記号番号

受験記号番号

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

社会で生きていると、ときどき問題にぶつかることがある。ほとんどの場合は、努力によって解決できる。つまり、時間と労力をかければ問題は消える。それができないときでも、どうすれば良いのか、と誰かに助けを求めれば、たいていのことは解決する。人間の社会は、お互いに助け合う仕組みを備えているから、それほど「考える」必要に迫られる問題は発生しない、ともいえる。もちろん、不幸な事故、あるいは災害、病気などによって起こる問題で、考えたところで簡単に解決できないものも多いが、それでも、被害を最小限にするために、いつも最善の道を探って、人は生きているのである。

問題というと、学校のテストとか、クイズのようなものを連想する人もいるだろう。あの類(たぐい)のものは、たしかに「考える」必要がある。テストの問題の大部分は、「知識」を問うもので、覚えたことを思い出し、習った法則に当てはめて適切なものを選択することになる。

ただし、数学やクイズの一部には、そういった種類とは一線を画する問題が存在する。それらは、知識にも関係がなく、また、適用できるような法則もない。思い出すこともできず、どういった理屈で計算すれば良いのかもわからない。

わからないので答を聞くと、「あ、なるほどね」と一瞬にして「わかる」ことが多い。けれども、ではどうやってそれを考えれば良いのか、という道筋は、やっぱりわからないままだ。偶然に答を思いついた人だって、それはわからない。「どのようにして、そういうアイデアを思いつくのか」と尋ねられても、「いや、考えていたら、なんとなく思いついた」としか答えられない。これをこう計算し、これこれこういった理論によって導いた、という筋道がないからだ。

数学が得意な人の思考は、このような「出所のわからない発想」が、問題を解く思考の出発点になっている。思いついたものを確かめるための計算が、もちろん必要だから、発想力だけでは正解には至らないが、しかし、発想がなければ、何をどう考えて良いのかさえわからない。

この「発想」すなわち、「思いつく」ことは、実は一般に認識されている「考える」とは、まったく違った頭脳活動なのである。だから、「考えればわかるだろう」と言われて考えてみても、計算する、論理的に導く、手法を当てはめる、過去の知識や経験を思い出す、最適なものを選ぶ、というような普通の「考え方」では実現できない。

発想というのは、論理のジャンプのような行為であって、筋道のないところへ跳(と)ぶ思考ともいえる。当然ながら、それは「非論理的」である。発想には、想像力が必要のように思えるが、では、想像してみよう、と言われても、なにをどう思い浮かべれば良いのか、さっぱりわからないだろう。

想像というのは、ないものを思い浮かべることだが、まったくないものを突然頭にイメージすることは極めて難しいし、また、できたとしても、無関係で使いものにならない無駄なことばかり思いついてしまうだろう。全然関係のないものではなく、少しは掠(かす)っていなくて

はいけない。つまり、なんらかの「ヒント」になりそうな、なにかしら「関連のあるもの」を思いつければ、ヒットの効率が高まる。

ようするにここが、「バールのようなもの」を探す行為と似ているのである。犯罪が例ではいささか面白くないので、たとえばこんなケースを考えてもらいたい。

部屋の整理をしていて、ちょっとした棚を作れば本がもう一列並べられることを発想したとしよう。板は手持ちがあるが、その板を支えるものが必要だ。これをホームセンタへ買いものにいく友人に、ついでにこんなものを買ってきてほしい、と依頼することになった。「L型金具と木ネジ」という具体的な依頼をすれば目的が達せられる可能性が高い。しかし、その名称の商品がもし店になければ友人は買ってこない。寸法を指定した方が間違いがないけれど、それには具体的に図面を描いたりして、いろいろなことを決定しておく必要がある。しかも、そのような具体的な指定をすれば、その寸法でないものは使えない、と判断されるだろう。

一方、自分の部屋の状態や手持ちの板などを友人に見せて、「こんなふうにしたい」という事情を理解してもらう。すると、金具でも良いし、支えとなるブロックや棒でも可能かもしれない、となって、選択肢はぐんと増える。

このとき、「これがこんなふうに上手くできそうなもの」というのが抽象的な依頼のし方である。言葉では、「支えになりそうなもの」「金具のようなもの」というくらいがせいぜいだろう。

この抽象的な伝達は、上手くいけば、自分が想像していたものよりもさらに良いアイデアを得ることだってできる。友達がたまたま便利なグッズを店で見つけて買ってきてくれるかもしれない。これは、「この寸法のこの金具を」と具体的に依頼したとき、けっして得られない結果といえる。

ただ、依頼された側の友人は、ホームセンタで少なからず悩まなくてはいけない。使えそうかどうかを判断しなければならないし、万が一駄目だったときに責任を問われる。もしこれが、仕事として依頼するような（たとえば、契約を結ぶような）ものだった場合には、具体的に指定をしなければ、あとでトラブルになる。だから、仕事では具体的な指示や約束が重要視されるのである。

友人に依頼するのではなく、自分でホームセンタへ行くことを考えてみよう。この場合は、言葉で伝達する必要もなく、また事情を誰かに説明したり、理解してもらう必要もない。ホームセンタにある商品を眺めながら、自分で考えれば良い。そこにある品で使えそうなものを見つける作業になる。また、もう少し好奇心があれば、全然違うジャンルでも面白そうな品物に目が留まるかもしれない。こうしたものをあれこれ見ていくうちに、問題をどう解決すれば良いのかを考える。たとえば、棚に拘る必要もない。箱に入れるとか、まったく別の方法を思いつくかもしれない。「棚を作る」と決めてかかる必要も本来ないのでは、と気づく。

（森博嗣『人間はいろいろな問題についてどう考えていけば良いのか』〈新潮社〉による。38～43頁）

受験記号番号	

この回答欄は縦書きに使っても横書きに使っても構いません。